新型コロナウイルス感染症拡大下における親子遊び場の意義を再考する

── 短期大学子育て支援広場参画の保護者視点を通して ──

狩　野　奈緒子

Rethinking the Significance of Parent-Child Playgrounds under the Spread of COVID-19

── From the perspective of parents in the junior college childcare support plaza ──

Naoko Kanou

Abstract

The author presented a documentation album that recorded the progress of play between children and students for one year to parents who participated in the childcare support plaza under the spread of COVID-19.

In this paper, we asked parents for free comments and reconsidered the significance of play from the perspective of parents. In their comments, parents often expressed awareness of the environment in which play develops, which then enriches the experience of "physical contact" and "close interaction." It was found that parents participated in the "plaza" under COVID-19 in order to enhance the play environment.

It was found that it is possible to utilize the viewpoint of parents in the operation of the "plaza" in order to support interaction between local parents and children and the further maturation of the playground.

Key words：COVID-19, documentation, parental comments, play environment

要　　旨

筆者は新型コロナウイルス感染症拡大下の子育て支援広場に参加する保護者へ、子どもと学生との遊びの経過を１年間記録したドキュメンテーションアルバムを提示した。

本稿では、保護者に自由コメントを求め、保護者の視点を交えて、遊びの意義の再考察を行った。保護者コメントには「身体接触」や「密接なかかわりあい」の体験を豊かに演出する遊びが熟成する環境について気づきが多く記述された。保護者は、コロナ禍で、遊びの環境の充実のために「広場」に参加していることが分かった。

地域親子の交流と遊び場の更なる熟成を支えるために、保護者の視点を「広場」運営に活かすことが可能であることが分かった。

Ⅰ．問題の所在・研究目的

2020年２月28日文科省通知[注1]により、新型コロナウイルス感染症拡大予防のために全国一斉学校休業、休園措置

が取られた。

同年３月11日、WHO事務局長より新型コロナウイルス感染症がパンデミックに至っているという認識が示され、日本では３月13日に新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づき、４月７日に７都府県に緊急事態宣言が発出され、４月16日には全国に対象が拡大された[注2]。

一斉休校措置後、学力低下、生活習慣の乱れ、ゲームやソーシャルメディアへの依存などに起因する子どもの心身の不調の訴えや学校不適応等が増加した一方[1)]、外出制限が続く自粛生活の中、家族コミュニケーションが活発になったという事例もあり[2)]、個別的で、二極化した家庭の状況がうかがえた。

家庭内と同じく、子育ての主要な部分を担う保育園では、「三密」の回避がうたわれる中で、子どもの発達に不可欠な身体的接触、子どものマスクの着用や食事の際の会話、外遊び等に関しても比較的柔軟な対応が報告された[注3]。

家庭内の状況については、全国認定こども園協会の「新型コロナウイルスに係る就学前の子育て家庭への緊急アンケート調査」[注4]によると、保護者の４人に３人が「子育てや生活で困った」、６割の家庭で「子どもに気になる変化」があったと回答している。

すなわち、本来は、学校、幼稚園、保育施設等の教育者、保育者に見守られた集団で生活し、学び育つ日常を保障されていた子どもたちが、コロナ禍で否応なしに家庭で「自粛」「感染予防」しながら、保護者がその責任を全面的に負う分断された環境に放り込まれ、影響は子どもだけでなく家庭にとって重大であったことがわかる。

本学子育て支援広場「親と子のひろば」「さくらっこ広場」は、コロナ禍により2020年２月末より活動を休止し、2020年７月末に「親と子のひろば」、８月末に「さくらっこ広場」の活動をそれぞれ再開した。

「親と子のひろば」は短大こども保育コース教員とスタッフ１名（保育士　パート職員）により運営されてきた一方、「さくらっこ広場」は2016年度より運営主体を地域保護者に移行し、短大保育室を「広場」に貸し出し、スタッフとして教員である筆者が中心に学生を交えて開催を継続している。

「さくらっこ広場」は保護者役員３名に筆者が加わる形で、運営に関する意思決定を行ってきた。コロナ禍においての開催中止や再開時期、再開方法の意思決定は、筆者が中心に保護者代表と協議し、対象保護者にメールや郵送等で個別に伝達する形を取った。

約半年にわたる休会中は、連絡を３回行ったが、保護者からは随意返信があり、一様に「再会を楽しみにしている」という返信を受けた。

各家庭の保護者は、懸命に育児や生活と向き合い続けており、「再会」が親子や家庭の回復につながることが期待されると考えた。

本稿では、筆者がかかわる「さくらっこ広場」（以降「広場」と記す）再開後の親子と学生の「遊び」の推移を中心に、子どもの遊びの展開と深まり、親子同士の交流、学生参加の意味など、複合的な「広場」の機能について再考する。

「広場」は開設15年目を迎え、2011年５月、東日本大震災発災２か月後、東京電力第１原子力発電所水素爆発による低線量被爆影響下の福島市で再開した経緯がある[3)]。

子どもの遊び場の保障が、パンデミック下の子どもの発達支援、地域保護者支援から派生する地域コミュニティーの継続など、複合的な意義と可能性について考察することを研究の目的とする。

Ⅱ．研究方法

筆者は、「広場」開催時には、毎回ドキュメンテーション型保育通信「さくらっこ便り」[注5]を発行している。

本稿では、「さくらっこ便り」のために撮影してきた写真と動画を基にドキュメンテーションを作成する。筆者のドキュメンテーションに、短い説明コメントを付けたものを保護者に提示した。さらに、パンデミック下の2020年８月から2021年７月までの11か月間、継続参加した保護者を抽出し、ドキュメンテーションへのコメント記入を依頼

した。

ドキュメンテーションは、子どもの遊びの展開や、学生や保護者とのかかわり、保護者同士のかかわりなどの観点から抽出したスライド資料として提示した。

保護者には、７場面の遊びのドキュメンテーションへのコメントと、最後に自由記述を求めた。

また、同じドキュメンテーションを筆者の卒業研究ゼミの学生７名にも配布し、学生たちは「広場」に参加しての振り返りや、ゼミでの対話を繰り返した。

マーガレット・カーらは、ニュージーランドの保育カリキュラムであるテファリキの考え方の中で、「学びの物語」（learning story）を活用し、「学び手」である子どもたちの学びの経過を、保育者だけでなく保護者も描写することで、保育集団の場と家庭のような異なる場をつなぎながら、学びの継続性を捉え直す意味を述べた[4)]。

松井ら[5)]は、香川県丸亀市の丸亀ひまわり保育園において、「連絡帳としての通信」ではなく、「子どもに向けた」記録として写真記録を基にしたラーニングストーリーを作成し、保育の評価にも活用するという実践を紹介している。

筆者は、特別支援を要するＡ児の育ちの経過について、短大子育て支援広場（さくらっこ広場）、幼稚園、小学校、家庭の場をつなぎ、捉え直すこと目的とし、筆者作成のドキュメンテーションへの保護者のコメント記述と対話を依頼し、保護者視点を交えた子ども理解を試みた[6)7)]。

本稿では、保護者に依頼したコメントから、保護者自身のコロナ禍の「遊び」への視点を可視化した。その結果を基に、子どもたちの遊びの深化、学生と子どものかかわりについて、学生と筆者の対話の観点も加えて、捉え直しを行う。保護者の考える望ましい子育て環境の視点を可視化しながら、「コロナ禍の遊び場の意義」を考察する。

なお、保護者には研究の趣旨を個別に文書と口頭で伝え、掲載の同意を得た。

Ⅲ．「広場」再開後の参加者数推移

１．2020年８月～2021年７月までの「広場」開催と参加者数の推移

「広場」の参加者数について、親子組数、親子人数、学生数を表１に表した。

「広場」は2020年８月22日から2021年７月31日の間に17回開催した。

親子組数は、10組までの申し込み制とし、学生参加も８名程度とした。

その結果、５組から10組の親子が毎回参加し、11名から23名までの親子の参加人数は、例年と変化がほとんどなかった。

学生は、保育者養成コース１年生、２年生学生が随時参加し、学生参加がない回も２回あったが、保護者の協力を得て普段と変わりない「広場」を展開した。

なお、福島県では、2021年５月15日～５月31日の間、県独自の非常事態宣言が出されたが、短大の授業は対面授業で継続され、「広場」開催も予定通り継続した。

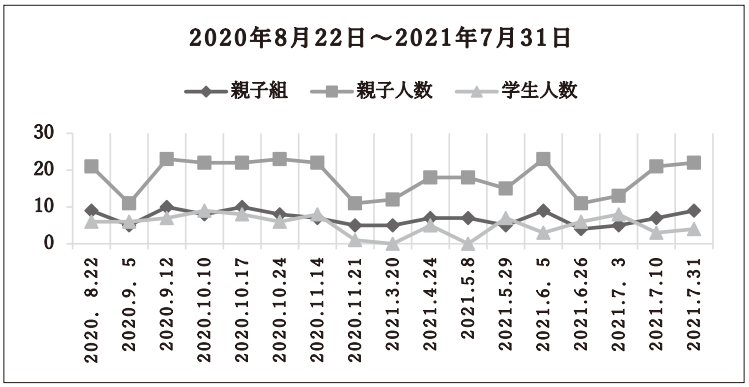

図１　さくらっこ広場　参加者数推移

Ⅳ　ドキュメンテーションに関する保護者のコメント

2021年７月に参加した保護者９組にコメントを依頼し、６組（母親４名、父親２名）の親子より回答を得た。

回答期間は１か月半程度とし、各遊びのテーマごとに10枚～20枚、５～10ページの写真スライドアルバムを「さくらっこアルバム」として配布し、可能な限り子どもの感想も入れたコメントを依頼した。

返信方法は、紙面郵送、Microsoft Formsによる回答を選択可能とした。

１．ドキュメンテーションの概要と、保護者コメント（抽出）

次に、遊びの７場面のドキュメンテーション⑴～⑺について代表的な写真３枚ずつ抽出し、筆者がその概要を記し、保護者から寄せられた、コメントを抽出し、記す。

⑴　久しぶり！いつも通りに遊ぶよ　　2020年８月

久しぶりに集まってきた親子は、最初緊張気味で、保護者はマスク越しに硬い表情を見せていた。子どもたちも、行動自粛期間中に家庭ではゲームなどで遊ぶ時間も多く、最初は戸惑い気味の子どもが見られた。しかし、学生と共に遊びが始まると、徐々に好きな遊びに熱中し、その傍らで、保護者達はそれまでの経緯や不安などを話し込む様子が多くみられた。

図２　ドキュメンテーション⑴

保護者コメント

- 兄は「最初はゲームを作ろうとしたけど、ネジがない、ソフトを入れるところがないから、作れそうなクワガタムシを作ったんだ。」と話しました。妹はこのときは、家ですでに、絵の具と遊ぶと決めていたので、汚れてもいい黒の服とエプロンで行くと自分で決めていました。
  私は（母）コロナ禍の中、久しぶりのさくらっこだったので、他の保護者の方といつも通り喋っても大丈夫なのか、距離の図り方がいまいち掴めず、最初はぎこちなかったかもです。お話していくうちに、自粛期間中のことや聞きたい事が多すぎてそんな気持ちもなくなり、いつも通りになったと思います。
- 子どもは遊ぶ事は忘れないので、ここに来たらこれをして遊ぶ！とある程度決めていると思います。いつでも自由に発想し、遊びが発展していくのが楽しくて眺めています。子どもが居るだけ遊びがあってすごいと思います。
- 久しぶりの再開にありがたくうれしく参加しました。この時は学校行事が中止になったとか、この先どうなるのかとか、という話ばかりだった気がしますが、そういった話をする場がなかったので、ありがたい再開でした。

⑵　小麦粉粘土にビーズが…！～学生の「遊び観」の転換　　2020年10月

子どもたちは、学生が準備した小麦粉粘土を気持ちよさそうにこね、道具を使って伸す子どもたちがいる一方、小麦粉をボールに大量に出して、食紅やサラダ油など大量に混ぜ込む子どもが出てきた。ビーズを大量に小麦粉粘土に入れ、全身が粉だらけになる子どもがいた。学生たちは、驚きながらもその遊びの世界で、子どもたちのイメージを共に楽しんだ。

図3　ドキュメンテーション(2)

保護者コメント

- 最初は静かに小麦粉粘土を作って、色を付けて、と普通に作ってたはずが、いつの間にか新しく見つけたアイテムでいろいろな物に変化していくのが、素晴らしいです。大人では発想しない事ができるのはすごいと思います。娘は持って帰って来て、ずっと遊んでました。
- この日は二人とも小麦粉粘土にビーズを大量に埋め込んで重箱に入れて家に持ち帰りました。恐らく二人にとっては料理をしている気分だったのでしょう。家でも料理の「お手伝い」が大好きで、特に何かと何かを「混ぜる」ことが大好きです。恐らく違う物が混ざって別のものになる過程が興味深いのだと思います。二人が絵の具を混ぜるのも大好きなのも、同じ発想だと思います。子どもにとって「違う物を混ぜる」ということは知的な刺激になるのだと思います。

(3)「自然」を感じるさくらっこたち　～野菜クッキング・庭で虫捕り　　2020年10月～11月

10月、11月と食物栄養専攻の学生と教員により、野菜を使ったスイーツの親子クッキングを行った。感染予防のために、調理したものは持ち帰らず、事前に調理し包装されたものを持ち帰るという方法を、準備段階から保護者と相談し実施した。

当日、様々なカボチャの展示や、野菜の切り口の比較などを通して、学生、教員、保護者、子どもともに対話が弾んだ。また、庭に植えられたトマトを収穫し、虫捕りをしながら学生と遊ぶ子どもが見られ、屋外へ遊びの展開も見られた。

図4　ドキュメンテーション(3)

保護者コメント

- 料理をする事に興味を持ち始めた時期だったので、積極的に参加していました。野菜を触って見る、切って見る、色んな経験ができてありがたいです。家で食べる時はできたものが出てきて食べるので、野菜の形、重さ、色、どんな風に切って、どんな風に作っているのか、と言うことが分かって勉強になったと思います。
- お姉さんに「虫になって」と言ったのは、うちの子だったと思います。外でよく声をかけられ、二人とも物怖じせず、自分達が拒否される筈がない、と思っているようです。でも、どんな無理難題でも学生さん達が応えてくれるためか、二人とも短大に行くのが大好きです。「子どもの頃の思い出は、その人の一生の宝である」ということを何かの本で読みましたが、短大で学生さんと遊んだ思い出は、二人にとってまさに宝なのだと思います。正直、親だけだと疲れてしまって、そこまで付き合えないこともありますので、若い学生さんが子どもと遊んでくれるのは、親としても、とても助かります。

⑷　奇妙なお医者さんごっこ～継続する遊びの経過　　2020年10月～11月

入院、手術を経験したＸ児（小６）は、お医者さんごっこになると、専門的な用語を使いながら、治療場面を再現する遊び方をする。ある日､｢コロナですね。入院してください」というＹ児の一言から､お医者さんごっこが始まり、他児や他の保護者まで入りながら、学生が患者になり、時には役割が逆転し、奇妙なストーリーで、２か月間遊びが継続した。最終回に、皆で病院のタワーを完成して終了した。

図５　ドキュメンテーション⑷

保護者コメント

- 子どもが自ら遊びに「コロナ」を取り入れることによって子どもなりにコロナ禍に対応していく様子が感じられました。
- お医者さんごっこにはずっとハマっていて、良く家でも兄弟でやっていました。さくらっこでは相手がお兄さんやお姉さんの事が多く、新しい言葉や発想があるので、どんどん発展していくのだと思います。とても楽しかったと思います。
- これは本当に楽しくて、久しぶりに笑い転げました。コロナも他の病気も全て遊びにして楽しんでしまう子どもたちが頼もしく感じました。それにしても、すべて毒薬で「安楽死」とは…。一人でも助けたかったです。最後のタワーも無事写真撮影できてよかったです。

⑸　さくらっこ広場　梅とり　　2021年５月

Ｙ児（３歳）が来室時に、保育室前の梅の木から落ちた青梅を拾い、見せてくれた。今年は保育室前の梅が豊作なので、皆で収穫することにした。ブルーシートを敷き、父親に肩車し、母親も率先して大きな声を掛けながら、棒で実をたたいて落とし、子どもたちも熱心に学生と実を拾い集め持ち帰った。保育室でも梅シロップを作成し、後日楽しんだ。

初めて参加したＩ児（２歳）は、最初母に抱かれて泣いていたが、学生がタイミングを見ながら徐々に近づき、最後は、他の子どもたちと梅拾いに自分も参加し、笑顔で帰ることができた。

図６　ドキュメンテーション⑸

保護者コメント

- １本の木でこんなにも大人も子どもも夢中になれると、楽しい経験をさせていただきました。娘も周りの人の真似をして、ホウキを持ち、木をつついて梅が落ちるように必死な顔、見ていて頼もしく感じました。さくらっこに参加するたび梅の木を見て「もう、梅さんなくなっちゃった？」と気にして見ています。恥ずかしさを覚えた娘、ママの手を離すのは不安、学生さんとの距離が少しずつ近づく姿には、互いに心が通じ合う様子が見られて、こうやって人とのかかわりの中で成長していくんだろうなと感じました。「お姉さん、また遊ぼうっていうかな」と、会話の中で話しています。

⑹　ままごとで広がる世界　　2021年４月～７月

ままごと遊びを毎回違う子どもたちが、様々なストーリーを、学生を交えて展開している。子どもたちのままごとのイメージに学生や、時には保護者が近づきながら、展開するストーリーに参加する。ケーキに「イチゴをのせるとメッチャおいしい」、チェーリングをラーメンに見立て、黄色いリングの「レモン味のラーメン」など、学生が目を見張るようイメージが展開され、年齢の違う子ども同士の関係や親同士の関係も生まれる。

図７　ドキュメンテーション⑹

保護者コメント

- 娘は「またＩちゃんと遊びたい！」と言います。スロースターター同士気があったのでしょうか（笑）年下の子を誘って遊ぶ姿に、あんなに「抱っこ抱っこ」のＲが成長した！と嬉しかったです。我が道を行くスタイルのお兄ちゃんも、この頃はＪくんという工作仲間が出来て走り回っていました。
- Ｒちゃんが「一緒に遊ぼう」と声を掛けてくれたきっかけから、ママとの距離を少しとりながらおままごとで遊び始めました。Ｒちゃんのおままごと遊びを見て真似したり、自ら遊びたいものを追加してもって来たり、仲良く二人で遊んでいてくれるのでママは周りの方々と話ができたりちょっとした時間が作れました。
- 家でも二人とも料理は大好きで、「お手伝い」をしたがります。想像ですが、素材が変化していく様子には、化学反応を見るような面白さ、意外感があるのかなと思います。包丁も大人が使う様子をいつも見ているので、ままごとでも上手に包丁が使えるのでしょう。

⑺　シャボン液と水鉄砲で思い切り水遊び　　2021年６月

最初は準備された遊び方で遊ぶＨ児であるが、シャボン液と絵の具を混ぜ合わせ、色付きのシャボン玉を作り、学生と「シャボン玉アート」の作品ができていく。その後、Ｈ児と学生が一緒に色水をテラスにあふれさせながら遊び続け、最後に、Ｈ児と学生たちが泡だらけになったテラスを片付けた。双子のＭ児とＳ児は、水鉄砲で学生たちに水をかけ、反応を楽しんでいた。最後は、水と泡が川のようにあふれたテラスと庭で、子どもたちも学生たちも精一杯遊んだ達成感で満足げだった。

図８　ドキュメンテーション⑺

保護者コメント

- 子どもでも作りやすいようなシャボン液のおかげで大きな子から小さな子まで楽しんでいる様子でした。最後はうちの子が最年長ということで片付けを手伝っていたという部分で成長を感じました。子どもは、「最後に大きな水溜まりから川みたいになるのが楽しかった」と言っています。
- 子どもの遊び方ってすごいと、写真を見ての一言です。「こうやったらどうなるかな？」「もしかしたら注意されるかもしれない」「やってみたい」親としては後々すごいことになるから遊びを止めてしまいそうですが、子どもの体験する遊びの流れは大事だなと思いました。
- 最初はシャボン玉をしていましたが、そのうちに絵の具で色をつけたり、水を増やしたりして、だんだん自分たちの遊びになっていくのが毎回見ていて楽しいです。最後は泡遊びになっていて、めっちゃくちゃ楽しそうでした。
- シャボン玉と水鉄砲は二人とも大好きで、いつも着替えが必要なほどびしょびしょになるまで遊びます。特に水鉄砲は、消防士になりきるらしく、二人とも両足を広げて踏ん張って発射します。花火の時に水鉄砲を持っていって、花火の火を消すように頼むと大喜びで発射していました。学生さん達も水に濡れて大変ですが、皆さん嫌な顔をせずに遊んでくれるので、二人ともとても楽しいようです。

2．ドキュメンテーションへの保護者コメントに関する小考察

「広場」参加の保護者全般に、遊びへの肯定的理解があるだけでなく、集まって遊ぶことやダイナミックに遊ぶことが、子どもにとっては必要であり、学校や園で行事や体験学習が中止されることに対しての不安、それを「広場」の遊びや活動で一部でも保障していくことが「ありがたい」という肯定的コメントが記述された。

また、遊びは大人にとっても「楽しい」、参加して「笑い転げた」というコメントや、コロナを遊びの中に取り入れる子どもたちに対して、「子どもなりに受け止める」「コロナに対応する」「病気も全て遊びにして楽しんでしまう頼もしさ」というコメントや、ダイナミックな遊び方に際して「発想や遊びの発展がすごい」と、総じて肯定的理解がされた。

このように、大人と子どもが遊びの価値や楽しさを共有し、遊びの中の子どもの力を再評価する視点を保護者が有している。

学生と子どもの遊びの中での信頼関係を基に、異年齢の子ども同士の関係が生まれたり深まったりする場面もある。保護者同士の関係も、学生と子どもがダイナミックに遊ぶ中でいつも通り安定した展開が保障される基盤となることも述べられた。

3．保護者の最終記述のキーワード分類、キーセンテンスの構造化

次に保護者の最終記述を分類しキーセンテンスを構造化し、図１に示した。

4．保護者最終記述に関する小考察

最終記述において、回答した保護者全員（６名）がコロナ禍での公共の遊び場の環境の変化、あるいは自宅での遊び方の変化について、記述している。

安全や感染予防の徹底を目的とした対策は「命を守る」ために必要である一方、「自由がなくなり」「場所を選ぶのが大変」になったという記述が多くある。

また、子どもの側は、特に３歳以下の幼児は、「自粛」の意味を理解できず、「あまり人と交流しないように」気を遣うなど、保護者の「ストレスも大きい」という記述がある。

一方、小学校中学年以上は「この状況に慣れて」きた様子を保護者が感じ、「大人より、子どものほうが世の中の変化に適応できる」可能性に言及する記述も見られた。

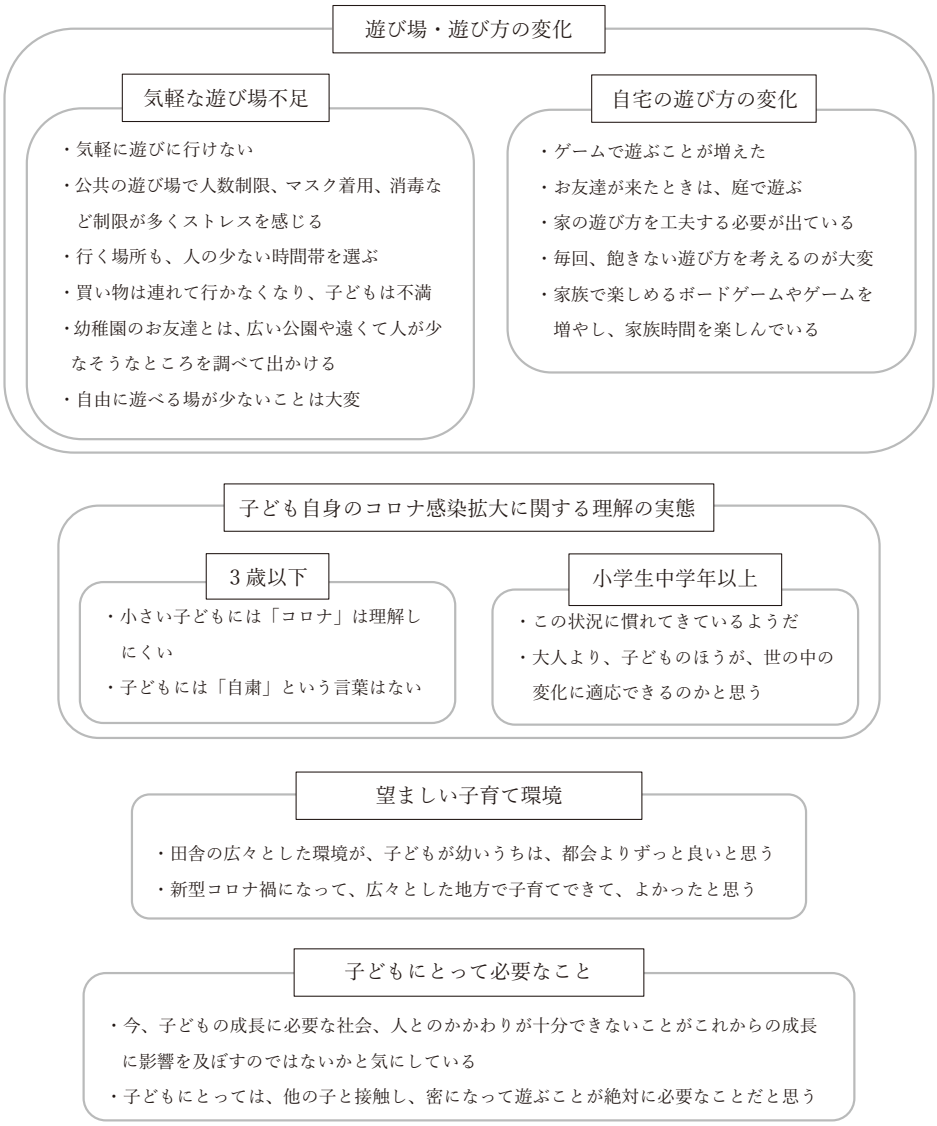

図９　保護者最終記述の構造図

最後に、現在の制限下においても、大都市部に比較すれば、現在の居住環境は、「広々とした地方」の環境下であり、「広々とした地方で子育てして」よかったと、現在の居住地域の子育て環境に関しての肯定的な記述もあった。

コロナ禍の制限下で、「人とのかかわりが十分できない」ことが、「これからの成長へ」影響がある可能性（記述１）や、子どもにとっての「接触」や「密になって遊ぶ」体験が成長に関しての重要な要素であると訴えるコメント（記述２）が見られた。「望ましい子育て環境」や「子どもにとって必要なこと」に関する２名の記述を抽出する。

保護者最終記述１

> コロナ以前は子どもの成長に合わせて思い切り遊べる場所、外気に触れるようなところへ多く連れて行っていたと思います。コロナ禍になってから、公共スペースの遊び場はロープが張られ、入れ替え制のある遊び場では時間が短くなり、人数制限、普段当たり前に利用していた場所に自由さがなくなり、苦労したときがあったと思いだします。
>
> 命を守る行動とコロナ対策をしているけれど、小さい子には「コロナ」理解が難しく、今、子どもの成長に必要な社会、人とのかかわりが十分にできない事が、これからの成長に影響を及ぼすのではないかと気にしています。早く安心した日常が送れるように祈るばかりです。

保護者最終記述２

私は自分が田舎で育ったせいか、自分の子ども達にも田舎の広々とした環境で育ってほしいと思います。もちろん都会には都会の良さもあるし、田舎には田舎で嫌なこともありますが、子どもが幼いうちに限っては、都会より田舎の方がずっとよいと思います。特に新型コロナになってからは、ほどよく人が少なくて広々とした地方で子育てできてよかったと心から思っています。もっとも、このように思うのは、私の子ども達が双子で、常に遊び相手がいるから、なのかも知れません。

新型コロナの恐怖はもちろんありますが、子どもにとっては、他の子と接触し、密になって遊ぶことが絶対に必要なのだと思います。コロナ前にはあまり意識しなかったのですが、新型コロナで人との接触が禁止されるようになって、改めて子どもにとって「接触すること」「密になること」の大切さを実感しました。

以上、制限された生活環境の中で、遊び環境が大きく変化し、子ども自身の環境変化に関する理解度の違いや適応力の違いに、年齢差や個人差はあるが、保護者は子どもたちの遊び環境の確保のために、できるだけの工夫や努力をしてきていることが伺われる。

家族の命を守るため、感染の予防の必要性は十分理解しながらも、子どもたちの社会性の成長を支えるためには、人と「接触」し、「密接にかかわり」ながら遊ぶ経験が必要と考え、それが現在の子育ての中で十分に確保できない状況下で育つ子どもの成長、発達への影響を危惧する視点を、保護者の記述から読み取ることができた。

Ⅴ　考　　察

１．新型コロナウイルス感染拡大下の子どもたちの「遊びの力」の熟成

ドキュメンテーションには、コロナ禍でも、子どもたちがひたすら遊びこむ姿が記録された。保護者コメントには「子どもがいるだけ遊びがある」「ここに来たら、この遊びをすると決めてくる」子どもたちの姿に関するコメントが複数あり、参加目的として「子どもの遊び」の場の確保があることは明確であった。

2020年８月22日に６か月ぶりに再開した「広場」であったが、再開後初回の保護者の戸惑いに対して、ほとんどの子どもたちは、普段通りに設定された保育室や、室外のプールなどでも抵抗なく学生たちと遊び始め、テラスでの絵の具遊びや、室内の工作なども、「子どもが期待して、自宅で準備」して参加したというコメントがあった。

その後、ダイナミックな小麦粉粘土遊びや、外遊び、子どもの「コロナですね」という言葉を発端に２か月以上展開した奇妙なお医者さんごっこなど、その都度学生たちの「遊び観」を転換[注6]させながら、豊かな遊びが展開していくことになる[8)]。

遊びの展開や、その中に見える子どもたちの育ちは、コロナ禍以前に見劣りせず、より豊かに、生き生きと深化していく様子が見えた。

吉川[9)]は、コロナ時代に生きる子どもたちと家族の遊びの力について、地域の広場で、マスクをして遊ぶ子どもたちが集まっている姿を、昭和の路地裏で遊ぶ子どもたちの姿と重ね合わせ、「子どもたちには、この緊急事態でも遊べる力がそなわっている」と述べた。同じく、「緊急事態」の中で、家に籠った２か月余りだったが、「家にあるもの」で工夫して過ごすことができるのが、子どもの本来の姿でもあることを述べている。

吉川は、自粛生活の中で、家族コミュニケーションが活発になった事例も挙げる一方、マスク着用や接触、身体活動の制限などは、子どもにとっても大人にとっても「生命力を失われる」可能性に触れ、今後この制限下の工夫を考えるにあたって、「子どもたちの遊ぶ力から多くを学ぶことができる」のではないかと提言している。

筆者の卒業研究ゼミの学生たちは、毎年この「広場」に複数回参加しながら、子どもとのかかわりや、育ち、保護者とのかかわりなどを通した記録を基に対話を継続する。

令和３年度のゼミ学生には、保護者に配布したドキュメンテーションを同様に配布し、「広場」に参加した学生の

エピソード記録と共に、ドキュメンテーションについても対話を行った。その中で、学生が多く口にしたのは、子どもたちがとにかく「真剣に遊ぶ」という言葉だった。

ドキュメンテーション(7)「シャボン玉と水鉄砲で思い切り水遊び」の初回に参加した学生は、絵の具遊びとシャボン玉遊びの道具をテラスに準備していたが、結局絵の具もシャボン玉液も全て混ぜ込んでいく子どもたちに、「あっけにとられた」と言う。しかし、子どもたちの「真剣さ」に引き込まれるように、その遊びを支え続けると、数人の子どもたちは、泡だらけになったタライの水に手足を入れ始め、足や腕に泡を塗り始める子どもや、最後は裸になる子どもが何人も出て、驚いたと言う。

これは一見、大人のイメージを逸脱した遊び方であるが、子どもたちは実に「真剣だった」と学生は言う。学生自身の遊び観も大きく転換した場面であることがわかる。

家庭や、所属集団ではできないような、シャボン玉液や絵の具、水鉄砲など入り乱れた遊び方に発展する場面を、保護者は「大きな子から、小さな子まで楽しむ」と表現、参加した小学生は「最後は水たまりから、川みたいになって」楽しかったと語る。

また、「子どもってすごい」と思いながらも「親として後々すごいことになるから止めてしまいそう」だが、「子どもの遊びの流れって大切」だと気づく保護者の記述もある。

一方、大人にとっても「だんだん子どもたちの遊びになっていくのを見ているのは楽しい」という記述や、「水鉄砲で、消防士になりきって、足を踏ん張って発射する」姿を好意的に見ながらも、「濡れてたいへんですが、嫌な顔をせずに遊んでくれる」と、学生への信頼感に言及する記述もあった。

このように、大胆に遊びが展開する環境を、「広場」では、学生をはじめ保護者も、逸脱した遊び方に見える場面でも、お互いの信頼関係の中で保障していることがわかる。

その中で、子どもの遊びはますます大胆に展開し、全員が満足に毎回遊びきって終了することを繰り返している。

遊びへの「意欲」と「真剣さ」に満ち溢れた子どもたちを、共に自らの遊び観を転換し続けながら、学生も保護者も楽しみ続けることが、まさに「遊びの力」の熟成につながると考えられる。

2．遊びの体験が構築する関係性の重要さ

明和[10)11)]は、コロナ禍の子どもの育ちについて、「ヒトの脳と心は他者との身体接触によって育つ」プロセスが、特に発達初期は不可欠であると述べ、マスク着用による日常環境の影響についても言及する。

「安心できる特定の他者」との関係構築は、新たな生活様式の中で何よりも、子ども、大人を問わずに生活し続けるための最重要課題であることが、再認識させられる。

保護者最終記述２には、「新型コロナの恐怖はもちろんありますが、子どもにとっては、他の子と接触し、密になって遊ぶことが絶対に必要」「新型コロナで人との接触が禁止されるようになって、改めて子どもにとって『接触すること』『密になること』の大切さ」が、子育て当事者からの気づきとして記された。

「広場」は子育ての当事者の保護者同士だけでなく、学生やスタッフ教員も交えて、遊びの環境を設定し展開する場であるが、その中での「関係性」を土台とした育ちあいの意味を保護者自身も理解し、遊びの意味を捉え直し続けていることがわかる。

ドキュメンテーション(6)「ままごとで広がる世界」を見ると、ままごと遊びにはほとんど必ず学生が一緒に参加する様子がある。そこで、子どもたちの言葉やしぐさを見ながら、学生もままごとのイメージの世界に入りこんでいることがわかる。

ままごとのケーキを作りながら、イチゴを飾り付けた子どもが「これメッチャおいしいよ」と言えば、「ほんとだ」と共に楽しみながら、皿に取り分けられたケーキを学生や保護者はごちそうになる。黄色いリングを「レモン味のラー

メン」、ピンクのリングを「桃味のラーメン」に見立てた遊びが展開したことを、ドキュメンテーションを基に、その場に居合わせた学生たちは楽しい経験として語る。

保護者にとっても、リラックスした雰囲気で交流しながら子どもの遊びを眺め、時には遊びに参加することで、自身も楽しめる場が熟成していることが、遊びながら「笑い転げる」「眺めていても楽しい」というコメントに表されている。

また、遊びの中で、学生との関係を基に、年齢差のある子ども同士が関わり合い、保護者自身も交流に参加できるようになったという記述もある。

遊びは、楽しいイメージの発展と共有の中で、「関係性」を育む貴重な体験であることに、学生も保護者も共に気づいていることがわかる。

一方、保護者は自粛期間中、自宅での遊び方を、感染を予防しながら屋外での触れ合いの体験、室内で家族同士が触れ合う体験など、それぞれ懸命に工夫しながら生活してきたことがコメントから伺われる。

このように、コロナ禍において、保護者は、「身体接触」や「密接なかかわりあい」の体験を豊かに演出する遊びの環境の重要性に気づき、子育て環境の充実を目的として「広場」に参加してきていることは明らかである。

3．保護者と共に「広場」の熟成を支える

以上、新型コロナ感染症拡大下の「広場」での子どもの遊びの力の熟成と保護者の遊びの意味の捉え直しが、子ども、保護者、学生やスタッフ同士の「広場」の中の関係性の発展と熟成につながっている経過を報告し、考察してきた。

地域親子の交流と遊び場の更なる熟成を支えるために、保護者の視点を「広場」運営に活かすことが可能であり、必要であると考えられる。

普光院[12]は、保護者は子ども同士の関係を理解するかを保育士の多くの言葉によってインパクトを受け、ドキュメンテーションなどの「見える化」は保育現場と家庭の双方向的な伝えあいを活性化すると述べた。

北野[13]は、保護者に乳幼児教育が小学校の教科主義教育ではなく、社会情動的を育む経験主義教育であることを伝え、共通理解を図り、連携を深めることは、保育者の大切な専門性であることを述べ、ドキュメンテーション、ポートフォリオ、ラーニングストーリーなどの活用に言及している。

これまで、保育通信としてドキュメンテーション型通信「さくらっこ便り」を筆者は作成配布してきたが、ドキュメンテーションを「広場」の運営により有効に活用する方法を、今後も検討していきたい。

謝　辞

本研究の趣旨を理解いただき、多忙な中、丁寧にご回答いただいた保護者の皆様に、深謝する。コロナ禍に負けず、元気に「広場」に参加し、教員スタッフ、学生を大いに励ましてくださっている全ての親子の皆様、学内外の「広場」を応援して下さる皆様に厚く感謝申し上げる。

付　記

この論文の一部を、第74回日本保育学会にてポスター発表した[8]。

脚　注

注１　文部科学省（2020年２月28日）新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について（通知）

注２　NHK特設サイト　新型コロナウイルス　https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/emergency/

注３　こども環境学会「コロナ禍状況の保育所・幼稚園・認定こども園における休園・登園自粛への対応とこどもたちへの影響に関する調査――中間報告」2020年７月15日～８月15日実施　回答者数273

注４　全国認定こども園協会　新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム　2020年５月15日～５月25日実施　回答者：０～６歳（小学校未就学児）の子どもを持つ保護者　5,777件（全国47都道府県）

注５　2021年11月６日現在、第92号発行

注６　赤木[14]は、大人が障害児と遊ぶためには、遊び方のスキルを上げるだけでなく、大人自身の遊び観の転換を行う必要があることを述べた。既成の遊び観を作り変えながら、遊びを理解する意義について述べている。

文　献

１）大野 繁・加戸陽子・眞田 敏（2021）神経発達症をともなう児童のCOVID-19 感染拡大による臨時休校中および学校再開後の適応状況．広島文化学園大学大学院教育学研究科　子ども学論集(7)，1-14.

２）吉川眞理（2020）コロナ時代に生きる子どもたちと家族の遊びの力について．子育て支援と心理臨床19，13-15，福村出版.

３）狩野奈緒子・淋 光江・長谷川茂（2012）桜の聖母短期大学「親と子の広場」における親子関係支援第１報――東日本大震災後の親子関係支援を通しての一考察――．桜の聖母短期大学紀要第36号，35-56.

４）マーガレット・カー／ウェンディ・リー著　大宮勇雄・塩崎美穂・鈴木佐喜子・松井剛太監訳　磯部裕子・川田 学・菊地知子・矢萩恭子訳（2020）学び手はいかにアイデンティティを構築していくか――保幼小におけるアセスメントの実践「学びの物語」――．ひとなる書房.

５）丸亀ひまわり保育園・松井剛太（2018）子どもの育ちを保護者とともに喜び合う，ひとなる書房.

６）狩野奈緒子（2020）特別支援を要するＡ児の就学移行支援――子育て支援広場のコーディネート機能の検証と課題――．桜の聖母短期大学紀要　第44号，1-13.

７）狩野奈緒子（2021）特別支援を要するＡ児の「学びの物語」を紡ぐ――ドキュメンテーションを活用した対話から保護者の視点をつなぐ――．桜の聖母短期大学紀要　第45号，65-76.

８）狩野奈緒子（2021）コロナ禍に親子が集う「広場」の意味――子育て支援広場における遊びと交流の場の保障――．日本保育学会第74回大会発表論文集，803-804.

９）前掲　２）

10）明和政子（2019）ヒトの発達の謎を解く――胎児期から人類の未来まで．ちくま新書.

11）明和政子（2021）コロナ禍でのヒトの育ち．発達　165，95-102，ミネルヴァ書房.

12）普光院亜紀（2019）保護者等の観点から見た保育の質の課題．発達　158，46-51，ミネルヴァ書房.

13）北野幸子（2020）乳幼児期の育ちと学び――見えにくい育ちこそ大切に――，北野幸子監修・著：子どもと保育者でつくる育ちの記録――あそびの中の育ちを可視化する――，第１章　保育の可視化と発信のすすめ．8-14，日本標準.

14）赤木和重（2019）遊びと遊び心の剝奪――障害と貧困の重なるところで．小西佑馬・川田 守編著　松本伊智朗編集代表：遊び・育ち・経験――子どもの世界を守る，第３章　98-124，赤石書店.